

## 音楽鑑賞におけるメディアの違いが 鑑賞者のイメージにおよぼす影響

吉永誠吾\*・吉田道雄\*\*

The Effect of Different Media on Listeners' Image of Music

Seigo YOSHINAGA, Michio YOSHIDA

(Received October 13, 1987)

### はじめに

最近の音楽鑑賞におけるメディアの多様化には著しいものがある。従来のレコードやテープレコーダーに加え、レーザーディスク、コンパクトディスクなどの普及には目を見張るばかりである。視覚的にも聴覚的にも、生演奏により近い音楽鑑賞が可能になったといえることができる。これらのメディアを有効に利用することは、これからの音楽鑑賞教育をより効果的ならしめるために欠かすことができない。従って、教師はこれらのメディアに通じておくことが必要である。

しかし、音楽が録音も録画もできなかった時代には、当然のことながら音楽は生演奏のみによって鑑賞されていた。演奏された音楽は1回限りのもので二度と同じ演奏を聞くことはできなかったのである。そもそもいかにすばらしい名演であっても、それが録音・録画されたものであれば、それはあくまで音楽の記録であるから、演奏者と鑑賞者のコミュニケーションは成立しない。最近若者たちがヘッドフォンステレオで音楽を聞いている姿を見かけることがある。それは外界から閉ざされた彼らの孤独な世界である。ヘッドフォンステレオが悪いというのではないが、少なくともそこには、音楽を互いに他の人々と分かちあう姿はみられないのである。音楽の本当の姿は生演奏にこそあるのではないだろう。

か。いったい、本当の名演奏とは、演奏者と聴衆とでともに作っていくものであろう。そこで本稿では、レコードなどの音だけによる鑑賞、ビデオのように映像をともなった鑑賞、および生演奏による鑑賞を行った結果を分析し、それらメディアの違いが鑑賞者のイメージにおよぼす影響について検討する。

### 方 法

実験は各メディアの効果を明らかにするために、以下に述べる3条件を設定した、いずれも被験者は熊本大学教育学部音楽教材研究受講生である。

#### 条件1

鑑賞順：レコード→ビデオ→生演奏

被験者：音楽教材受講生 110名

鑑賞作品：ベートベン作曲 パイオリンソナタ第5番「春」第1楽章

演奏者：①レコード：バイオリン イツァーク・パールマン、ピアノ ウラディミール・アシュケナージ

②ビデオ：レコードと同じメンバーによるNHKで放送されたものの

③生演奏：バイオリン 吉永誠吾、ピアノ 新開理美子（教育学部音楽科学生）

\* 音楽科

\*\* 教育工学センター

## 条件2

鑑賞順 : 生演奏→ビデオ→レコード

被験者 : 音楽教材受講生 80名

鑑賞作品 : 条件1と同じ

演奏者 : 条件1と同じ

## 条件3

鑑賞順 : 生演奏→テープ

被験者 : 音楽教材受講生92名

鑑賞作品 : サン＝サーンス作曲「ハバネラ」

演奏者 : ①生演奏: バイオリン 吉永誠吾, ピアノ 佐藤恭子 (教育学部音楽科学生)

②テープ: 同じメンバーによる演奏をテープに録音したもの

実験にあたっては以下の機器を使用した。

テープ録音 : ①マイクロフォン (ソニー E CM-54 (ステレオ) ②テープデッキ (ティアック A-6600 テープスピード 19cm / s)

ビデオ録画 : ①ビデオデッキ (ソニー SL-J7 テープスピード  $\beta$  I)

レコード演奏装置: ①プレーヤー (デュアル 721) ②カートリッジ (オルトフォン M-15Eスーパー) ③アンプ (ラックス L-100) ④スピーカー (タンノイ オートグラフ)

条件1, 条件2を設定することによって, 各メディアの効果をより鮮明にし, 視聴順による影響をできるだけ除くようにした。この意図を徹底させるためには, 3つのメディアをランダムに配置する計画が求められるが, 諸般の事情から正規の授業課程の中でしか, 実験を実施することができなかったため, この程度の実験コントロールで満足せざるを得なかった。さらに条件1, 2ではレコードおよびビデオの演奏者と生演奏者が異なっている。この演奏者の違いによる影響もありうると考えて, 同じ演奏者による生演奏とテープによる視聴条件を, 条件3として実験を実施した。

各被験者は, 各々の演奏を試聴するたびに13対の形容詞を中心にしたことばから構成されたSD方式の尺度に回答するよう求められた (表1)。形容詞

表1 評定項目

回 答 項 目	
1. あかるい	くらい
2. あたたかい	つめたい
3. あまい	しぶい
4. 力強い	弱々しい
5. のびのびした	きゅうくつな
6. うきうきした	しみじみした
7. 生き生きした	生氣のない
8. 晴れやかな	うれいを帯びた
9. 軽やかな	重々しい
10. 陽気な	沈んだ
11. 安定した	不安定な
12. 親しみやすい	親しみにくい
13. 感動	無感動

の選択にあたっては, 岩下豊彦 (1972) が用いたものから特にメディアの効果と関連を持っていると思われる12組を筆者が選択し, さらに「感動—無感動」の1組を加えて13組の尺度を作成した。いずれも7段階尺度で回答を行った。本研究ではこれらの回答の違いを分析することによって, 各メディアの影響・効果を明らかにする。

なお, 各条件での被験者はそれぞれ異なっており, 同じ者が重複して実験に参加した例はない。

## 結果と考察

条件1および条件2の回答結果をそれぞれ表2, 表3に示す。両条件ともに全体としては, メディアによって, 視聴者にその印象やイメージに違いがでるということは明らかにされていない。当然順序による効果もほとんど認められない。ただわずかに条件1において「感動—無感動」に差が認められた。そこでより詳細に分析してみると生演奏の方がレコードよりも有意に「感動」的であったと回答していた。条件1が生演奏を最後に聴いていることを考えると, あるいは既にレコードやビデオによってある程度その音楽について視聴体験を持った場合には, それらよりはやはり「生の方がいい」という評価をするようになったといえるかもしれない。しかしこの点については他の補足情報を得ていないので, あくまで推測の域を越えることはできない。

条件1, 2ではメディアの間に演奏者の違いがあった。そこで, 同じ演奏者の生と音声録音との間

表2 条件1 (レコード→ビデオ→生演奏) における各条件の平均値 (N=110)  
( ) 内はSD

回 答 項 目	レコード	ビデオ	生演奏
1. あかるい くらい	3.48(3.20)	3.15(2.81)	3.21(2.86)
2. あたたかい つめたい	3.62(3.35)	3.25(2.94)	2.93(2.63)
3. あまい しぶい	3.41(3.07)	3.60(3.32)	3.40(3.19)
4. 力強い 弱々しい	3.04(2.72)	3.34(2.07)	2.95(2.76)
5. のびのびした きゅうくつな	2.94(2.73)	2.68(2.51)	2.59(2.29)
6. うきうきした しみじみした	3.51(3.19)	3.45(3.18)	3.43(3.14)
7. 生き生きした 生気のない	2.77(2.55)	2.28(2.00)	2.30(1.99)
8. 晴れやかな うれいを帯びた	3.62(3.33)	3.30(3.03)	3.51(3.27)
9. 軽やかな 重々しい	3.16(2.90)	3.01(2.74)	2.95(2.66)
10. 陽気な 沈んだ	3.80(3.48)	3.33(2.97)	3.36(3.05)
11. 安定した 不安定な	3.16(2.93)	2.98(2.76)	3.46(3.21)
12. 親しみやすい 親しみにくい	3.45(3.20)	3.15(2.86)	2.68(2.49)
*13. 感動 無感動	3.34(3.05)	2.64(2.39)	2.22(1.98)

条件間に有意差 (一要因の分散分析) が認められたものについては、項目番号に \* (5%) をつけている (表3, 表4もおなじ)

表3 条件2 (生演奏→ビデオ→レコード) における各条件の平均値 (N=80)  
( ) 内はSD

回 答 項 目	生演奏	ビデオ	レコード
1. あかるい くらい	3.04(2.74)	2.84(2.49)	2.70(2.31)
2. あたたかい つめたい	3.25(2.97)	3.30(2.94)	3.09(2.73)
3. あまい しぶい	3.20(3.02)	3.55(3.24)	3.56(3.27)
4. 力強い 弱々しい	2.55(2.17)	2.11(1.82)	2.73(2.41)
5. のびのびした きゅうくつな	2.69(2.50)	2.28(2.09)	2.61(2.43)
6. うきうきした しみじみした	3.71(3.46)	3.55(3.28)	3.51(3.31)
7. 生き生きした 生気のない	2.71(2.55)	2.20(1.97)	2.00(1.62)
8. 晴れやかな うれいを帯びた	3.49(3.26)	3.15(2.92)	3.10(2.82)
9. 軽やかな 重々しい	3.43(3.22)	3.03(2.84)	2.71(2.46)
10. 陽気な 沈んだ	3.48(3.19)	3.19(2.83)	3.09(2.76)
11. 安定した 不安定な	2.45(2.19)	2.48(2.25)	3.30(3.01)
12. 親しみやすい 親しみにくい	3.15(2.93)	2.99(2.72)	2.73(2.36)
13. 感動 無感動	2.96(2.83)	2.39(2.17)	2.38(2.14)

表4 条件3(生演奏→テープ)における各条件の平均値(N=92)  
( )内はSD

回 答 項 目		生演奏	テープ
1.	あかるい くらい	3.42(3.16)	3.99(3.67)
*2.	あたたかい つめたい	3.02(2.81)	3.96(3.59)
3.	あまい しぶい	3.54(3.34)	3.89(3.60)
4.	力強い 弱々しい	2.63(2.40)	3.18(2.93)
*5.	のびのびした きゅうくつな	2.53(2.25)	3.61(3.32)
6.	うきうきした しみじみした	4.12(3.83)	4.24(3.89)
*7.	生き生きした 生気のない	2.10(1.84)	3.63(3.31)
8.	晴れやかな うれいを帯びた	3.75(3.51)	4.16(3.82)
9.	軽やかな 重々しい	3.59(3.40)	4.20(3.85)
10.	陽気な 沈んだ	3.58(3.27)	4.09(3.75)
11.	安定した 不安定な	3.18(2.98)	3.40(3.08)
*12.	親しみやすい 親しみにくい	2.82(2.58)	3.73(3.40)
*13.	感動 無感動	2.15(1.88)	3.21(2.92)

に視聴覚に与える効果が認められるかどうかを検討すすめるために条件3を設定した。その結果が表4である。この条件下では2, 5, 7, 12, 13の5項目で有意差が見いだされた, いずれの場合も生演奏の方がプラスの印象を与えていることがわかる。つまり生演奏の方がより「あたたか」く, より「のびのび」「生き生き」しており, また「親しみやすく」「感動」的だということになる。条件3で用いた作品「ハバネラ」は変化に富んだ曲であり, ある部分は躍動的であるかと思えば, ある部分はしみじみとした雰囲気を持っている。こうしたところから, 「甘い-しぶい」, 「うきうきした-しみじみした」, 「晴れやかな-うれいを帯びた」「軽やかな-重々しい」, 「陽気な-しずんだ」といった項目では比較的「どちらともいえない」という回答が多くなっている。その点では, 全体的に録音, 生演奏ともに曲の特徴をとらえているということが出来る。その中で, 上記の5項目について生演奏の方が有意にプラスの印象を与えていたわけで, やはり生演奏でなければならないような効果を視聴者に与えているといっていだらう。

以上のような結果から, メディアがおよぼす効果を十分に明らかにすることはできなかったが, 少なくとも生演奏には, そのほかのメディアが持っていない重要な要素が備わっている可能性については, それなりの示唆を得たということが出来るだろう。

## ま と め

### 音楽鑑賞教育への提言

最後に今回得られた結果をも考慮にいれながら, 今後の音楽鑑賞教育についての若干の提言を行いたい。日本人が, テレビやラジオ等を通じて音楽を頻繁に聴いていることについては既にふれた(吉永誠吾 1986)。それによると, テレビによる音楽鑑賞が1位を占めている。本研究においてもビデオと生演奏との間には明確な差が見いだせなかったが, こうしたテレビによる鑑賞慣れということも影響しているのかもしれない。また日本人の音楽の選好度については, 歌謡曲が第1位であった。こうした音楽に対する好みはマスメディア, 特にテレビの影響が大きいと思われる。要するに, わざわざクラシックのコンサートへ出かけていくよりは, 茶の間で歌謡曲を見聴きする方が, 一般の好みにあっているということである。よほどのことがなければ, 一般の人々がコンサートへわざわざ出かけるような動機づけが起こらないということである。

こうした状況のもとで, 音楽鑑賞教育は多くの問題を抱えている。

まず第1に, 小中学校における音楽鑑賞教育においては, いまだにレコードやテープによる鑑賞が最も一般的である。しかし, たとえどのようなすばらしい演奏であろうと, 音だけによる鑑賞では不十分である。筆者自身も, これはすばらしいと思われるよ

うなレコードをたびたび学生に聴かせて、鑑賞に集中しないものがある。

大学生であってもこういう状況であるから、小学校の場合などでは、児童におとなしく名曲を鑑賞させることには少なからず無理があり、かえって子供たちを音楽教育から遠ざけてしまうといった結果を招くおそれすらある。今後は生演奏は無理だとしても、より児童の関心を引きやすく、また興味も持続しやすい映像をも備えたビデオやレーザーディスクによる教材の充実が必要になってくるだろう。そしてもちろん、できるだけ生演奏による鑑賞の機会を子供たちに与えてほしいと思う。筆者自身も、レコードなどを使っているときにはおしゃべりをしてる学生たちが、生演奏を聴く段になるとその反応がまるで違ってくことを経験している。そこには

音楽のジャンルの好き嫌いを越えたコミュニケーションがあり、感動がある。彼らの目は真剣に演奏者に注がれ、その一挙手一投足に神経を集中する。そして演奏が終わったときには、何か大きな仕事を終えたときのような充実感ともいべきものが、演奏者と聴衆とを包むのである。そのような生の演奏の音楽によってこそ、子供たちは音楽というものを理解し、好きになってくれるに違いないのである。

#### 引用文献

- 岩下豊彦 1972 情緒的意味空間の個人差に関する一実験的研究 心理学的研究, 43, 188-200.  
吉永誠吾 1986 学生の音楽に対する嗜好調査と分析 熊本大学教育学部紀要 人文科学, 35, 61-67.